

39. 『センス・オブ・ワンダー』から学ぶ建築環境教育に関する考察

0810920070 中塩梨芳  
指導教員 市川尚紀 講師

自然 人間 建築 建築環境教育 レイチェル・カーソン センス・オブ・ワンダー

1. はじめに

1-1 研究の背景

平成 23 年 3 月 11 日に東日本で起きた地震によって、美しいはずの自然や人の命を守るべきはずの建築が、人の命を奪う凶器と化した。自然や建築を人間の都合で上手く利用することは、人間が生きる上でいたしかたないことであるが、人間が建築や自然を支配する側面は大きくなりすぎた。このことに対する警鐘が今回の震災による被害が表すところではないか。よって、自然と人と建築のあり方を再定義すると共に、今後の建築環境教育を考察していく事とする。

1-2 方法

今後の自然と人と建築のあり方と、今後の建築環境教育を考察するに当たり、以下の三つの方法をとることとする。

- ①レイチェル・カーソンが書いた『センス・オブ・ワンダー』(表 1) を読んで、自然と人と建築のあり方と今後の建築環境教育について解釈をする。
- ②自然と人と建築を問いただす旅に出て、自然と人と建築のあり方と今後の建築環境教育を考える。
- ③『センス・オブ・ワンダー』の上映会を行い、鑑賞者の意見を参考にして、自然と人と建築のあり方と今後の建築環境教育に関する持論を展開する(表 2)。

表 1 レイチェル・カーソンと『センス・オブ・ワンダー』について


		説明
題名	センス・オブ・ワンダー	「センス・オブ・ワンダー」とは、「神秘さや不思議さに目を見はる感性」とレイチェル・カーソンは定義をしている。(23頁)。そして、もしレイチェル・カーソンが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持っているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー」を授けてくれるように頼むと述べています。
著者	レイチェル・カーソン	レイチェル・カーソン(Rachel Carson)は、1907年、米国生まれの海洋生物学者、内務省魚類・野生生物局生物専門官。著書に「沈黙の春」などがある。1964年、ガンにより死亡。幼い頃から自然と触れ合ってきた彼女は、環境問題が取り沙汰されていなかった時代に、環境問題の警鐘を鳴らした。
本の内容		子どもたちが知識を頭に詰め込むのではなく、「センス・オブ・ワンダー」を持って欲しいという思いが書かれたレイチェルの遺作。レイチェル・カーソンの姪の息子である幼いロジャーと自然のなかで過ごした思い出が綴られている。 *レイチェル・カーソン:センス・オブ・ワンダー、新潮社、pp7-60、

表 2 『センス・オブ・ワンダー』の上映会について

日時・時間	12月21・22日の13:00
場所	近畿大学工学部広島キャンパスE館C210
対象	近畿大学工学部建築学科 学生28名

2. 『センス・オブ・ワンダー』の上映会の結果

上映会で鑑賞者に、『センス・オブ・ワンダー』の中で心に響いたフレーズやセンテンス・感じた事・質問に記述式で答えてもらった。その結果を以下に参照する(表 3、

表 4、表 5)。

表 3 アンケートの結果

Q. 1 子どもの頃、プライベートで自然に触れ合って遊んでいたか? どのように触れ合っていたか?	
A. 自然に触れ合って遊んでいなかった(0人)	
A. 自然に触れ合って遊んでいた(28人)	
例: 自然で遊ぶ17人(芝すべり・畑・田んぼ・川遊び・秘密基地をつくる・生物との触れ合い)	他27人
Q. 2 小学校や中学校や高校で、自然と触れ合う授業はあったか? どんな授業だったか?	
A. 自然と触れ合う授業はなかった(3人)	
A. 自然に触れ合う授業があった(25人)	
例: 自然に触れ合い、感じる学習9人(農業実習・キャンプ・田植え・畑)	他18人
例: 自然を鑑賞する授業8人(農業実習・キャンプ・田植え・畑)	
Q. 3 ビデオを見て、自然と人と建築はどう関わらべきだと思うか?	
例: 人が、自然と人と建築が上手く関わる方法をみいだす。6人(自然界の構造を建築に活かす、意識を変える)	他14人
例: 自然のメカニズムを知って、建築物をたてる。5人(自然の変位と上手く暮らす)	

表 4 鑑賞者が心に響いたフレーズ

心に響いたフレーズ	感じた事
大洋の神の感情	表現の仕方が素晴らしい。
自然の大きな力	空気・音・気温・雰囲気といった自然のもつ独特な空間を言うのであろう。
自然界への探検	幼い頃に、自然をたくさん体験できることは良いことである。
植物のじゆうたん	豊かな自然であるということが、伝わってくる。
魔法つかいの杖のような	このように見えるのは、本当に綺麗な自然だということだろう。
妖精の国の舞台	想像力が素晴らしい。
古風な細長い動物	自然の美しさが、人間が作るものも凌駕して、美しいと思える。
地球の美しさや神秘を感じとれる人	同じことのように思えるが、これを違うものととらえられる人は、自然から学ぼうとする気持ちが大きいであろう。
地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人	
自然がくりかえすリフレイン	自然は退屈をしない。

表 5 鑑賞者が心に響いたセンテンス

心に響いたセンテンス	感じた事
海の荒々しい力の前に、たつたびきで立ちむかっているこの小さな生きもののかよわい姿を目にするたびに、わたしはなにか哲学的なものすら感じさせられています。	厳しい自然の中で小さな命が必死になって生きていることを感じた。カニの見方が、素直である。
わたしたちは、嵐の日も、おだやかな日も、夜も昼も探検にでかけていきます。それは、なにかを教えるためではなく、いっしょに楽しむためのものです。	同感である。頭ではなく、体で学ぶということのだろう。
いろいろな生きもの名前をしっかりと心にきざみこむという事にかけては、友だち同士で森へ探検にでかけ、発見のよろこびに胸をときめかせることほどいい方法はない、とわたしは確信しています。	喜びがあるからこそもっと知ろうとし、努力するものだと思った。
寝る時間がおそくなるからとか、服がぬれて着替えをしなければならぬからとか、じゆうたんを泥んこにするからといった理由で、ふつうの親たちが子どもから取りあげてしまう楽しみを、わたしたち家族はみなロジャーにゆずっていました。そしてともに楽しみを分かち合っていました。	大人の価値観を押し付けていない。自然と触れ合う事で感じる事、学ぶ事が出来る事があり、そういった環境をつくる事が重要なことだと思った。いい家族である。
月はゆっくりと湾のむこうにかたむいてゆき、海はいちめん銀色の炎に包まれました。その炎が、海岸の岩に埋まっていた雲母のかけらを照らすと、無数のダイヤモンドをちりばめたような光景があらわれました。	夜の美しさを感じた。都会などの明るい場所では感じる事の出来ないこと。例えが綺麗な。
「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。	同感である。
美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感嘆、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびまされると、次はその対象になるものについてももっとよく知りたいたいと思うようになります。	感受性を持つことで、他人への思いやりや、他とも関わりたいたいと思うようになる。最初から出来上がった知識を得るよりも、そこに至る過程が大事。
しかし、目には見えていないが、ほんとうには見えていないことも多いのです。	五感で、物事の外面だけでなく内面を考える事が大事。自分が使っていなかった感覚をよびましても、もう一度見ると見えていたものが見えてくるので感受性を学び直して、感じてみたいと思った。 自然の中でこのような事を感じた事がなく、大人でも難しい。

Consideration about the Architect Environmental Education Learned from "SENSE OF WONDER"

NAKASHIO Rika  
環境設計研究室

### 3.自然と人と建築のあり方のまとめ

自然と人と建築が、バランスのとれた関係でいる為には、人間の心が重要となる。建築は人が生み出す産物である為、人の意識だけで建築を自然や人とバランスの良いものや、悪いものに変えてしまう。では、どうゆう意識が人には必要なのか。そこでかつての日本人を思い返すのだ。かつての日本人はいつも身近に大自然を感じられるように建築の分野で工夫をしていた。

例として、京都府の竜安寺がある。広範囲の庭を取り入れ、庭を大自然に見立てて、自然を堪能していた。その庭が、物事を深く追及して本質を考える場となり、煩惱や欲をなくす無の境地を磨く場所となっていた。又、部屋の中でも大自然を堪能しようと、床の間に大きな盆栽を飾り、木に見立てる。その近くに富士山の掛け軸をかけ、山に見立てる。最後に水石を置いて、海を連想させる。

庭という建築や、盆栽というインテリアなどを使って、建築に携わる私達は人がいつも身近に自然を感じることが出来る環境をつくっていく必要があるのではないか。そうすることで、自然が私達人間にとって必要な存在であることを日々の生活から感じ、人間が自然崩壊することを防ぐことが可能と考える。

### 4. 今後の建築環境教育のまとめ

美しい建築とは、技術者の技術的な能力や努力だけでつくられるものではないと感じる。美しい建築に欠かせないのは、つくる者の心である。この心が羊のような心であればあるほど美しい建築は出来る。では羊のような心掛けとは何なのだろうか。羊は、皮も肉も骨も全て他の動物や人間、世のため人のために奉仕する動物である。つまり、どれだけ他のために世のために自分は奉仕できたか、その奉仕の大きさが大きければ大きいほど美しさは増すということである。これを物語るかのように、美しいという漢字は、羊が大きいと書く。そこに、美しさの秘密が隠されていたのであるが、首をかしげてしまう人がいると思うので、事例を挙げる事とする。東京タワーがつくられた当時は、今のように高い建物を十分に建設するための機械は備わっておらず、なんと命綱が無かった。つまり、命がけの仕事だったということだ。命綱のない作業場は、日に日に空へと高くなっていくのだ。当然、高くなれば高くなるほど突風は勢いを増す状況下でつくったのだ。自分の命もかえりみず、世のために働いた一人一人の職人の羊のような仕事、それが東京タワーの輝きなのだ。そう、私達技術者には、このような感性が必要なのだ。

レイチェル・カーソンは、『センス・オブ・ワンダー』の中でこのように言っている。(「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみ

ちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持っているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。)

私たちに置き換えればこういうことだと考える。ここでいう純粋な感性のある子どもは、まだ建築という仕事を社会に出てしていない私たち学生。そして、感動を分かち合ってくれる大人は、大学の先生方だということである。つまり、まだ社会に出て建築の仕事をしていない私たちは、建築の技術を何にも知らない建築界の子ども。だからこそ、社会人にはない建築を知り尽くした人にはない、建築の神秘さや不思議さに目を見張る感性がそなわっている。そして、先生方はこの純粋な感性を一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれるそんな存在であってほしいということなのではないだろうか。よって建築学科の学生は、今しか感じる事の出来ない感受性を大切に、先生方は建築家の卵である生徒と一緒に感動や喜びを分かち合う、といった建築環境教育をつくるのが望ましいと考える。

### 5.おわりに

純粋な感性というのは、幼い子どもだけが持ち合わせているのではなく、まだその道の人となっていない建築学科の学生をはじめとするあらゆる分野の学生も持ち合わせている感性なのだ。だからこそ、私達はまだその道を知らない純粋な感性であらゆる建築物に対して、建築というものに対して、今しか気付けない事を見つけて、感じておく必要があるのだ。

### 参考文献

- 1) 加茂直樹：社会哲学の現代的展開,世界思想社,1999.4
- 2) 土倉亮一：自然と環境の教育における映像の利用, 京都教育大学環境教育研究年報第 8 号, pp.113-122,2000.3
- 3) レイチェル・カーソン：沈黙の春、新潮社、pp.6-200,1996.7